外耳炎について

外耳炎は、細菌・真菌感染を主とする外耳道の炎症を言います。ただし、感染を起こす原因には様々な要因があり、感染がない場合もあります。

ほとんどの場合、治療と同時に症状は改善されますが、耳道の深部の病状が改善していないことが多く、また本当の原因は持続しているため、再燃や再発が起きやすく、そのため慢性化・難治性する症例が多くなります。しっかり治す事、しっかり維持する事が重要です。

基本的には、犬や猫に耳掃除は必要ありませんが、外耳炎の既往がある動物、好発種、体質など考えた場合、定期的に点耳や耳道の洗浄を行なう必要があります。

１、原因

①　耳道の性質

構造：Ｌ字型（垂直耳道と水平耳道）、細く狭い、暗い、暖かい、適度の湿度、通気性

性質：耳垢腺の分泌、易感染性、耳毛

②　体質：脂漏体質、易感染性、ｱﾚﾙｷﾞｰ

③　異物（ゴミや草など）、水

④　感染：細菌、真菌、外部寄生虫

⑤　疾患：甲状腺疾患、腫瘍

２、症状

①　痒み・痛み：頭を振る、肢で耳や頭部を掻く、擦り付ける、触れるのを嫌がる、悲鳴

②　分泌物：黒・茶褐色・黄緑色などの液状分泌物や耳垢塊

③　炎症：耳介や耳道口の腫れや肥厚・発赤・膨隆、顔や顎・頚の炎症や硬結

④　腫瘤：耳介や耳道口・耳道入口に見られる小腫瘤、顔や顎・頚の大腫瘤・潰瘍

⑤　流涎、顎関節異常（重度の炎症や腫瘍の場合）

⑥　神経症状（重度の炎症、中耳・内耳炎、腫瘍など）：斜頸、眼球振盪

⑦　元気・食欲の減退や消失、神経過敏

３、検査

①　耳道鏡検査：耳道・鼓膜の状態、分泌物の量と質、腫瘤の有無、寄生虫の有無

②　細胞診：耳道粘膜の性状、耳垢の性状、細菌・真菌・寄生虫の確認

③　Ｘ線検査：耳道全体の状態、腫瘍の浸潤部分の確認

④　細菌培養検査・嫌気性細菌培養検査・抗生物質感受性試験・真菌培養検査

⑤　CT・MRI 検査

４、治療

①　手術：耳道部分切除術、総耳道切除術、腫瘍摘出術

②　耳道処置：定期的に耳道内清浄化・洗浄、分泌物の摘除、薬剤の注入

（ｳｫﾀｰﾋﾟｯｸや洗浄用ﾁｭｰﾌﾞ、ｼﾘﾝｼﾞを使用して洗浄液を使用する場合もあります）

(..)φ重症例では、週２～３回、大抵は週１回の通院から徐々に間隔をあけていきます。

ｽｹｼﾞｭｰﾙ例：第一選択のお薬→１週後の洗浄×２回→点耳薬の変更→通院間隔の延長

③　点耳：抗生物質・抗真菌薬・殺ダニ剤

ｽﾃﾛｲﾄﾞ

ｱﾛﾏｵｲﾙ（ﾃｨｰﾄﾘｰなど）

耳垢洗浄薬・消毒薬

④　その他：内服薬や注射薬　抗生物質・抗真菌薬・ｽﾃﾛｲﾄﾞなど

漢方薬（分泌抑制や感染防御）

基礎疾患の治療

ｽﾎﾟｯﾄｵﾝ　殺ダニ剤

(..)φヒゼンダニの寄生を原因とする外耳炎では、ダニの寄生による外耳炎だけでなく、細菌や真菌の混合感染、耳道粘膜の分泌過剰などによる外耳炎も併発しています。そのため、それぞれの原因に対する治療を選択しなければいけません。

現在では、ダニや感染に対しては、効果のある薬剤の使用によりある程度の期間で治癒することが可能になりました。が、耳漏に対しての効果的な治療は難しく、ｽﾃﾛｲﾄﾞが効果を発揮しますが、長期にわたる使用は勧められません。そこで、分泌過剰に対する治療（脂漏性外耳炎？）は、重症時はｽﾃﾛｲﾄﾞ合剤を使用し、その後分泌過剰が再燃する場合は、最低限外耳炎への進行を防ぐ目的で、定期的な耳道内洗浄や自家での洗浄処置を行ないます。

この分泌過剰は、長期に亘り残り、場合により生涯の処置が必要になる場合もあります。また、この症状は、ｱﾚﾙｷﾞｰやその他の外耳炎の後遺症、脂漏体質でも起こることが知られています。